



『ペスト』

カミュ／宮崎嶺雄訳 新潮社／新潮文庫

本館	請求記号：X/080/Sh61/Cam	資料ID：700632953
Knowledge Base	請求記号：J/953/C14	資料ID：701846099

商学部教授 瀬下 博之

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に変更された。2019年末ごろから続いたこのパンデミックは、少なくとも、この文章を書いている2023年12月時点では、ほぼ終息した印象さえある。パンデミックの最中では、身近すぎて読む気が起きなかった感染症の流行を扱った作品を、この機会に読んでみるのもよいだろう。感染症の流行を扱った作品として私が思い浮かぶのは、小松左京の『復活の日』とアルベール・カミュ（Albert Camus）の『ペスト』である。どちらも古い作品だが、決して出版年の古さを感じさせない。たとえば、「復活の日」は、1960年代に出版された近未来SF小説だが、あたかも今回のパンデミックを見てから描いたかのような設定に驚愕させられる。ここで推薦する「ペスト」からは、時代背景はともかく、感染症流行のような苦難に対する、さまざまな人々のかわり方に強い普遍性を感じさせられる。

この作品は、アルジェリアの一都市が、ペストの流行に見舞われて封鎖され、その封鎖が解かれてゆくまでを、ペストと苦闘する医師とその周辺市民の行動と考え方について、記録文的に描いている作品である。作品は淡々とした文体で綴られているが、それゆえに、そこにおける医師や市民の生き様や考え方に、深く思いを至らされる。堅苦しく取っ付きにくい印象を持つかもしれないが、記録文的な記述のせいもあって読みやすく、読み進めるだけでも多くのことを考えさせられる作品だと思う。人生の最も多感な時期に新型コロナウイルス感染症によるパンデミックという未曾有の経験をした皆さんには、一層深くこの作品を味わえることと思う。